



説教要旨「カビも生えないチョコレート」

使徒言行録6章1～15節

神は神殿を建立したソロモンに向かって、「わたしはあなたがわたしに憐れみを乞い、祈り求めるのを聞いた。わたしはあなたが建てたこの神殿を聖別し、そこにわたしの名をとこしえに置く。わたしは絶えずこれに目を向け、心を寄せる」（列王記上9章3節）と約束されました。

もともとなんの力ももたないただの寄留の民であったイスラエル民族を、神がその憐れみによって顧みて神の民とされました。そしてソロモンは神の憐れみを乞い、祈り求めたことによって、ただの建物が神の住まう神殿とされたのです。「わたしはこんなにも無力で、神様の憐れみがなければなにもできない存在です。だから神様、共にいて下さい」という切なる祈りによって、神は神殿に臨在し、祝福してくださったのです。

ところがイスラエルは、エルサレムの神殿でささげる礼拝や生け贄を、神の前に功績とし、祝福をもたらす善行だと自負するようになってしまいました。そして神に選ばれた自分たちは、恵みを受けるに価する優等民族だと誤解していったのです。そこでは、神殿の存在そのものが、神からの恵みを保証する巨大な「お守り」となってしまい、そればかりかそこで彼らが捧げる自己満足的な礼拝を、神の前に功績と考え、神の恵みを引き出すための善行としたのです。それはもはや神殿崇拜であり、神殿自体が偶像と成り果ててしまったのです。

捕らえられ、最高法院で裁判にかけられたステファノは、こうした神殿の姿を批判していきます。見た目には荘厳な神殿であっても、その内実は本来の神殿のあり方からかけ離れた、カビも生えないチョコレート（見せかけばかりでその内実は全くの別物）になってしまっているのです。

わたしたちは礼拝において神の憐れみを乞い願います。それは自らの無力さを、そして罪深さを公に表すことであります。自分自身には何一つ誇るものがないと言い表すことです。それはとても辛く苦しいことです。けれども、その辛く苦しい所においてこそ神は隣在されるのです。共にいて下さりその苦しみを担って下さるのです。